松島大原遺跡

平成９年度松島大原公園墓地造成事業(第２期)
に伴う埋蔵文化財第２次緊急発掘調査報告書

１９９８年

長野県上伊那郡箕輪町土地開発公社
上伊那郡箕輪町教育委員会

松島大原遺跡

平成９年度松島大原公園墓地造成事業(第２期)
に伴う埋蔵文化財第２次緊急発掘調査報告書

１９９８年

長野県上伊那郡箕輪町土地開発公社
上伊那郡箕輪町教育委員会

序

箕輪町は、伊那谷の北部、歴史の古い藤原の里にあり、東西にそびえる山脈と、天竜川や山から流れる中小河川、そして河岸段丘に代表される複雑な地形とが織りなす、水と緑の自然あふれる美しい郷土であります。遥か先史の頃より、河川を中心とした水辺に人々が暮らし始め、彼ら先人達の日々の努力の積み重ねによって、今日の箕輪町へと発展してきました。その証として、私たちの町には、輝かしい文化と歴史を今に伝える多くの文化財があります。その多くは、日頃私たちの目に触れることの少ない遺跡、古墳などの埋蔵文化財であります。

町の西部を流れる深沢川の両岸一帯は、今から25年前に実施された中央自動車道西宮線建設工事に先立つ堂地遺跡と中道遺跡の発掘調査で、縄文時代及び奈良、平安時代を中心とした、先人達の生活を物語る貴重な資料が発見されたことにより、郷土の歴史と文化を語る上で、欠かすことのできない重要な遺跡群の一つであることがわかりました。松島大原遺跡もこの遺跡群の中にあり、隣接する堂地遺跡との深い関わりを持つものと言えるでしょう。

本書は、町土地開発公社が計画する「松島大原公園墓地」の第２期造成事業に先立ち、町教育委員会が実施した緊急発掘調査の報告書であります。平成６年度に実施した同事業の第１次調査結果とともに、多大な成果を得ることができました。内容につきましては、本書の中で詳細に記してありますので、多くの方々に広く活用され、郷土の歴史と文化の解明の一助となれば幸いと存じます。

最後になりましたが、本事業の遂行にあたり、深いご理解とご協力をいただきました、町土地開発公社並びに地元の松島区、そして調査関係者の皆様方に、本書の刊行をもちまして心から感謝申し上げます。

箕輪町教育委員会

教育長　藤沢健太郎

例　　言

1．本書は、長野県上伊那郡箕輪町中箕輪11,217番地１他に所在する松島大原遺跡の第２次緊急発掘調査報告書である。

2．本調査は、箕輪町土地開発公社より委託を受けて、箕輪町教育委員会が行ったものである。平成９年４月１日から８月31日まで現場作業を、９月１日から10年３月24日まで整理作業及び調査報告書の作成作業等を行った。

3．整理作業及び本書の作成にあたり、作業分担を以下のとおり行った。

遺物の洗浄・注記－井上　佳誉子、井沢　はずき、垣内　美保、穂谷　明子

遺物の接合・復元－福沢　幸一

遺構図の整理・トレース－井沢　はずき、根橋　とし子、宮下　容子

遺物の実測・トレース－井沢　はずき、根橋　とし子、宮下　容子

挿図作成－赤松　茂、根橋　とし子

写真撮影・図版作成－赤松　茂、後藤　主計

4．本書の編集及び執筆は、赤松　茂、根橋　とし子、福沢　幸一が行った。

5．出土鉄器の保存処理は、㈱帝京大学山梨文化財研究所に業務委託した。

6．調査地の空観写真撮影は、㈱ジャステックに委託した。

7．出土遺物及び図版類は、すべて箕輪町教育委員会が保管している。広く活用されたい。

8．調査及び本書の作成にあたり、各機関並びに個人の方々にご指導ご協力をいただいた。記して感謝申し上げる。

機関－松島区、八乙女区、長野県教育委員会、㈱長野県埋蔵文化財センター

個人－小平　和夫、竹村　武、友松　諭、福島　永

凡　　例

1．挿図の縮尺率は、各図の右角またはスケールに表示し、各図の種別ごとに統一している。

2．土層及び土器の色調は、『新版　標準土色帖』を用いて記してある。

3．土器の接合状況は、観察できるもののみ断面に表示してある。

4．遺構実測図中におけるスクリーントーン及びマークでの表示は、以下のとおりである。

▒－礫平面　▒－礫断面　●－土器　△－金属器

5．土器実測図中におけるスクリーントーンの表示は、以下のとおりである。

▒－須恵器断面　∴∴－土師器内面黒色処理

6．図版６～８（出土遺物）における「数字」は、図版番号と遺物番号を表す。

例…「８－１」は「第８図の１」である。

本文目次

序
例言・凡例
本文目次
挿図目次・表目次・図版目次

第Ⅰ章　発掘調査の概要……1
　第1節　調査に至る経過……1
　第2節　調査の概要……2
　第3節　調査日誌……3
第Ⅱ章　遺跡の環境……4
　第1節　地形と地質……4
　第2節　歴史環境……6
第Ⅲ章　調査結果……8
　第1節　調査方法と結果概要……8
　第2節　土層堆積状況……10
第Ⅳ章　遺構と遺物……11
　第1節　住居址……11
　第2節　溝状遺構……21
　第3節　土　坑……22
　第4節　ピット……22
　第5節　ロームマウンド……29
　第6節　遺構外出土遺物……31
第Ⅴ章　まとめ……32

図　版
報告書抄録

挿図目次

第1図　調査位置図……1
第2図　地形観察図……5
第3図　周辺遺跡分布図……7
第4図　調査区設定図……8
第5図　全体図……9
第6図　土層断面図……10
第7図　1号住居址実測図……12
第8図　1号住居址出土土器実測図……13
第9図　2号住居址実測図……14
第10図　2号住居址出土土器・鉄器実測図……15
第11図　3号住居址実測図……17
第12図　3号住居址出土土器実測図及び拓影図……17
第13図　4号住居址実測図……19
第14図　4号住居址出土土器・金属器実測図……20
第15図　1号溝状遺構出土土器実測図……22
第16図　溝状遺構実測図1……23・24
第17図　溝状遺構実測図2……25・26
第18図　土坑実測図……27
第19図　ピット実測図……29
第20図　ロームマウンド実測図……29
第21図　出土縄文・弥生土器拓影図……31

表目次

第1表　周辺遺跡一覧表……6
第2表　1号住居址出土土器観察表……13
第3表　2号住居址出土土器観察表……16
第4表　2号住居址出土鉄器観察表……16
第5表　3号住居址出土土器観察表……18
第6表　4号住居址出土土器観察表……21
第7表　4号住居址出土金属器観察表……21
第8表　1号溝状遺構出土土器観察表……22
第9表　土坑一覧表……28
第10表　ピット一覧表……30
第11表　ロームマウンド一覧表……30

図版目次

図版1　調査地空景、調査地近景（調査前・東方より）、土層堆積状況
図版2　1号住居址、1号住居址カマド、2号住居址
図版3　2号住居址カマド、2号住居址刀子出土状況、2号住居址ピンセット状鉄器出土状況、3号住居址
図版4　4号住居址、4号住居址カマド、溝状遺構（東方より）
図版5　1号溝状遺構土層断面（Ⅰ－Ⅰ'）、1号ロームマウンド、3号土坑、5号土坑、6・7号土坑、調査風景、ピット群1、ピット群2
図版6　出土遺物1
図版7　出土遺物2
図版8　出土遺物3

第Ⅰ章　発掘調査の概要

第１節　調査に至る経過

松島大原遺跡は、箕輪町松島地籍の北西部、天竜川に注ぐ中小河川によって形成された複合扇状地のほぼ中央部に位置し、深沢川右岸の微傾斜地に立地する。深沢川の両岸には、集落址を中心とした縄文、弥生、古墳、奈良、平安時代の複合遺跡地帯が広がる。折しも、昭和48年の中央自動車道の建設工事に先立って、右岸では堂地遺跡、左岸は大出地区の中道遺跡の発掘調査が実施された。その結果、両遺跡とも縄文、奈良・平安時代の大集落遺跡であることが判明し、特に後者の時代では、伊那谷北部を代表する遺跡の一つとして広く知られるようになった。

町教育委員会としては、昭和62・63年度と平成４～６年度に中道、堂地の両遺跡を、平成６・７年度には堂地遺跡に隣接する大道上遺跡の緊急発掘調査を実施し、多大な成果を得ている。また本遺跡においては、平成６年度に町土地開発公社による「松島大原公園墓地」の第１期造成工事に先立つ緊急発掘

第１図　調査位置図（１：25,000）

調査により、堂地遺跡の西方に継続する埋蔵文化財包蔵地であることが判った。

平成8年度に入り、同公社より公園墓地造成の第2期計画の提示を受け、平成6年度の調査結果を基に再三の協議を重ねてきた。その結果、同公社が経費のほぼ全額負担による全面協力で業務の委託を受け、計画面積およそ6,000㎡を事業実施に先立って、記録保存を目的とした第2次発掘調査を実施する運びとなった。

第2節　調査の概要

1	遺跡名	松島大原遺跡（まつしまおおはら）
2	所在地	長野県上伊那郡箕輪町大字中箕輪11,217番地1他
3	調査位置	東経137°58′10″、北緯35°55′25″、標高759～765m
4	委託者	箕輪町土地開発公社　理事長　井沢　通治
5	委託契約日	平成9年3月31日（費用減額による変更契約日－平成9年12月25日）
6	契約期間	平成9年4月1日～10年3月24日
7	発掘調査期間	平成9年4月1日～同年8月31日
8	整理期間	平成9年9月1日～10年3月21日
9	事務局	教育長　藤沢健太郎
		副参事　柴　登巳夫（箕輪町郷土博物館館長）
		主幹　唐沢喜美子
		副主幹　赤松　茂（同館学芸員）
		主事　柴　秀毅（同館学芸員）
		臨時職員　酒井　峰子
10	調査団	団長　藤沢健太郎
		副団長　柴　登巳夫
		担当者　赤松　茂
		調査員　福沢　幸一
		調査員　根橋とし子
		調査団員　井沢はずき　泉沢徳三郎　伊藤　誠　井上佳誉子
		井上　武雄　井上　隆次　遠藤　茂　大槻　茂範
		大槻　泰人　垣内　美保　片桐　勇　倉田　千明
		桑原　旛　後藤　主計　小松　峰人　笹川　正秋
		田中　忠男　戸田　隆志　藤沢　具明　伯耆原　正
		穂谷　明子　堀　五百治　堀内　昭三　松田　貫一
		水田　重雄　宮下　容子　向山幸次郎　山田　武志

第3節　調　査　日　誌

4月7日（月）　調査予定範囲の東側調査区から作業を開始する。設定したトレンチを、大型バックホーにて掘削する。住居址等の遺構の検出が認められた。

4月8日（火）　表土除去作業、現場事務所設置、及び機材の搬入を行う。

4月9日（水）　終日表土除去作業。

4月10日（木）　調査団の結団式を行う。みのわ新聞、箕輪毎日新聞、長野日報新聞が取材に訪れる。遺構上面確認作業を行う。

4月11日（金）～18日（金）　終日遺構上面確認作業。

4月21日（月）　遺構上面確認作業をほぼ終了し、3軒の住居址と3条の溝状遺構、及び土坑、ピット、ローム マウンド等が検出された。各遺構の掘り下げを開始する。調査区土層堆積状況断面測量を行う。

4月23日（水）～5月26日（月）　各遺構の掘り下げをする。各遺構は、土層堆積状況の写真撮影、及び実測による記録作業、遺構平面の写真撮影、及び実測による記録作業、出土した遺物の取り上げ等の順序で作業を進める。箕輪新聞が取材に訪れる。遺構確認が困難な区域にはサブトレンチを設定する。

5月27日（火）～28日（水）　調査区の空測を行うため、調査区全体の清掃を終日行う。各遺構の掘り、及び記録作業も引き続き行う。

5月29日（木）　調査区の航空測量を行うため、もう一度調査区全体の清掃を行う。10時よりラジコンヘリにて航空測量を行う。午後より各遺構の掘り下げ、及び記録作業を行う。

5月30日（金）・6月10日（火）・12日（木）　各遺構の掘り下げ、及び記録作業を行う。

6月13日（金）　現時点までに検出された遺構の記録作業を完了する。

7月14日（月）　排土場所になっていた調査地内の排土を、再度大型バックホーにて除去し、表土除去作業、上面確認を行う。住居址1軒、土坑4基を検出する。

7月15日（火）　検出された各遺構の掘り下げを行う。

7月16日（水）～29日（火）　各遺構の掘り下げと記録作業を行う。銅製品が出土する。

7月30日（水）　すべての測量を終了し、本日にて調査を完了した。

第II章　遺跡の環境

第1節　地形と地質

箕輪町は、東は南アルプス、西は中央アルプスに挟まれた、南北約70kmにも及ぶ伊那盆地の北部に位置する。また諏訪湖を源とし、盆地の中央低地帯を南に流れる天竜川によって、町はほぼ東西に二分された形となっている。盆地は、天竜川の底地から両アルプスの山頂に至って、大起伏地形となっており、その景観から「伊那谷」と呼ばれる。

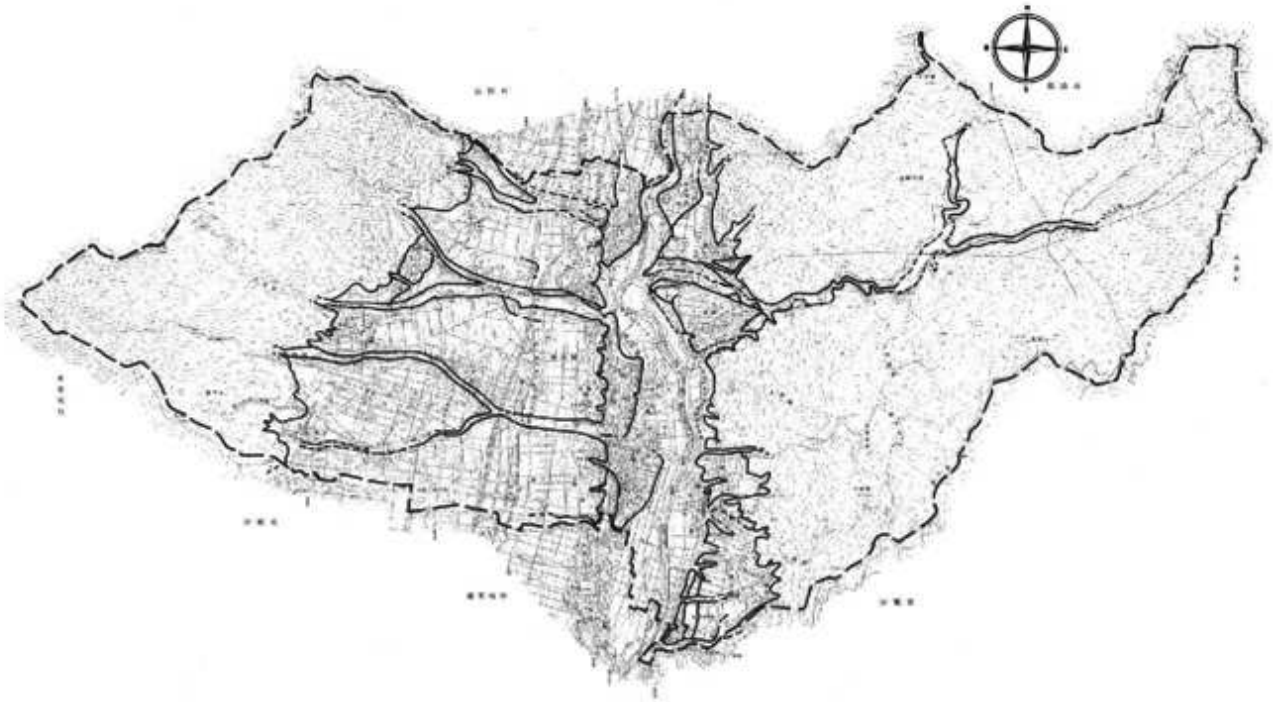
伊那谷は本州内陸部の中でも多くの活断層が分布し、約10km幅にそれが集中する、極めて活動的な構造盆地であることがわかっている。この地形は、第四期の地殻変動によって造り上げられた。

箕輪町を含む上伊那北部の竜西（天竜川西側の略称で、東側は「竜東」と呼ぶ）地域では、天竜川の各支流から押し出された土石流が重なり合い、現在の複合扇状地が形成された。竜西扇状地は、伊那谷の中で最も広いが、これは、上伊那南部の扇状地による土砂が天竜川をせき止めたことと、中央アルプスと交差する境峠断層により、中央アルプスの主要部が大きく西へ移動し、同様に経ヶ岳山麓の活断層帯も西へずれたため平らな盆地が造られたという二つの理由により、両アルプスから搬出された砂や礫が盆地内に蓄えられたためとされている。

その後、扇状地が侵食され、田切地形と呼ばれる深い谷状の特徴的な地形が生まれた。箕輪町でも天竜川に注ぐ桑沢、北の沢、深沢、帯無など各中小河川の扇状地扇端部にそれを観ることができる。

次に、箕輪町のもう一つの特徴的な地形景観である段丘に目を向けると、竜西地域では、天竜川より2ないし3列からなる、階段状の崖として確認できる。伊那谷各地でみられるこの段丘崖は、以前は天竜川が形成した河岸段丘と考えられていたが、現在では活断層の断層運動によって造りだされた断層崖

上空より遺跡地を望む（調査前）



第２図　地形観察図（１：100,000）

ということが各地で確認されている。箕輪町でも、局地的な地質調査が進めば、この段丘がどのように形成されたか分かるであろう。一方竜東地域では、唯一沢川の造りだした扇状地の南側だけが平坦な地形である。ほかの地域は、山が近いせいもあり、変化に富んだ地形を造り上げている。特に最南端の福与地区では、天竜川に流れ込む中小河川が、小規模な扇状地を掘り込んだ結果、丘陵地形が配列し、地形変化をさらに複雑にしている。しかしながら、現在では構造改善が進み、そういった地形の複雑な変化は、古い写真や地図で確認できるだけという場合が多く、元の地形を推測するのは難しくなってきている。

地形と同じように竜東と竜西では地質の面においても非対照的で、基盤岩の質も異なる。竜東側では、基盤岩を覆っている被覆層は、比較的浅く、断片的であるため、支流の谷沿いには基盤岩が広く露出し、天竜川まで続いている。竜西側では、竜東に比べ被覆層が厚いため、基盤岩の露出は少ない。また、御岳テフラの終息期以後も、各支流より礫の押し出しが続き、後氷期の黒ボク土までを含む土壌と砂礫が混合して扇状地の形成が続いたとされる。

今後箕輪町においても、遺跡をより理解するために、さらに詳しい地質調査が必要となるであろう。

引用・参考文献

伊那市教育委員会・上伊那地方事務所　小黒南原・伊勢並遺跡　緊急発掘調査報告書　1992.3

松島　信幸　伊那谷の造地形史　伊那谷の活断層と第四期地質　1995.3.31

第2節　歴　史　環　境

箕輪町は、天竜川を挟んで典型的な河岸段丘と扇状地が形成された地形で、湧水にも恵まれ先史より人が居住し易い好的な所といえる。町内にはそんな原始・古代人達が残した足跡ともいうべき多くの遺跡が散在し、現在のところ包蔵地182箇所、古墳27基、城館跡13箇所が確認され、上伊那郡内においても屈指の遺跡地帯として知られている。

その多くは河岸段丘上及び扇状地に立地しており、天竜川右岸の遺跡の分布状況は、2から3段になる河岸段丘の突端部にみられる遺跡と、深沢川や桑沢川などの天竜川に注ぐ小河川の両岸に所在する遺跡、東西の山裾に広がる遺跡、の3類に大別することができる。本年までに行われた発掘例を中心に前者について概観してみると、縄文・弥生・奈良・平安の各時代の集落址、及び墓域を中心とした生活の痕跡、さらに段丘崖下の箕輪遺跡に代表される生産遺跡も確認されている。

今後、これらの遺跡を保護していく上でも、この一帯における開発には、充分な注意を払っていく必要があるといえる。

第1表　周辺遺跡一覧表

遺跡番号	遺跡名	所在地	時代							立地	地目	備考
			旧	縄	弥	古	奈	平	中	近			
59	松島大原	中箕輪・松島		○			○	○	○		扇央	畑・墓地	調－平6
20	中道南	中箕輪・大出		○		○	○	○			扇央	畑・田	調－昭63
21	中道	中箕輪・大出	○	○		○	○	○	○		扇央	宅地・畑・田	調－昭48・63、平5・6
22	下原山口	中箕輪・大出		○				○	○	○	扇央	宅地・畑	
23	高見下	中箕輪・八乙女		○				○	○	○	扇央	宅地・畑	
24	東畑	中箕輪・八乙女		○		○		○			扇央	宅地・畑	
25	祝神	中箕輪・八乙女		○				○			扇央	宅地・畑	
26	五輪	中箕輪・八乙女		○	○	○		○	○	○	扇央	宅地・畑	調－昭48
27	上溝	中箕輪・八乙女		○				○			扇央	畑	
33	北又	中箕輪・下古田		○	○			○		○	扇央	畑	
34	竜ヶ崎	中箕輪・下古田	○	○				○			扇央	畑	
35	十朗	中箕輪・下古田		○				○			扇央	畑・田	
41	大塚坂頭	中箕輪・上古田		○			○				段丘突端	宅地・畑・田	
60	諏訪	中箕輪・松島		○			○	○			扇央	田	調－昭48
61	堂地	中箕輪・松島	○	○	○	○	○	○			扇央	宅地・田	調－昭和48・62、平5
62	大道上	中箕輪・松島		○				○			扇央	宅地・田	調～平6～8
78	南大原	中箕輪・松島		○							扇央	畑	
79	中原	中箕輪・中原		○				○			扇央	宅地・畑	
80	一の宮	中箕輪・木下		○		○		○			扇頂～扇央	畑	
82	並木下	中箕輪・木下		○				○			扇央	宅地・畑	調－昭48

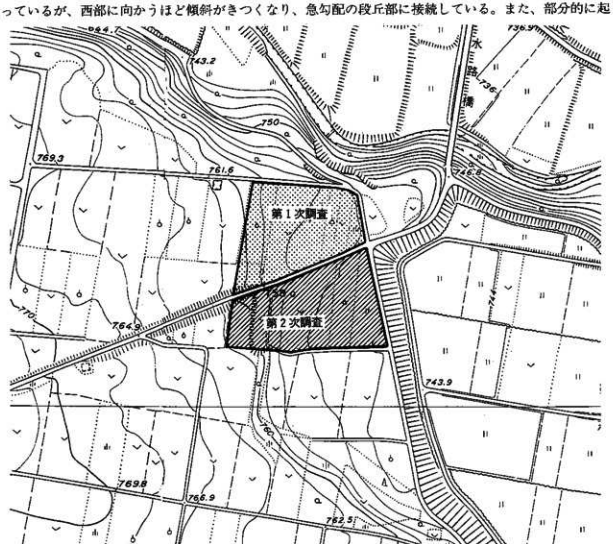
第3図　周辺遺跡分布図（1：10,000）

第Ⅲ章　調　査　結　果

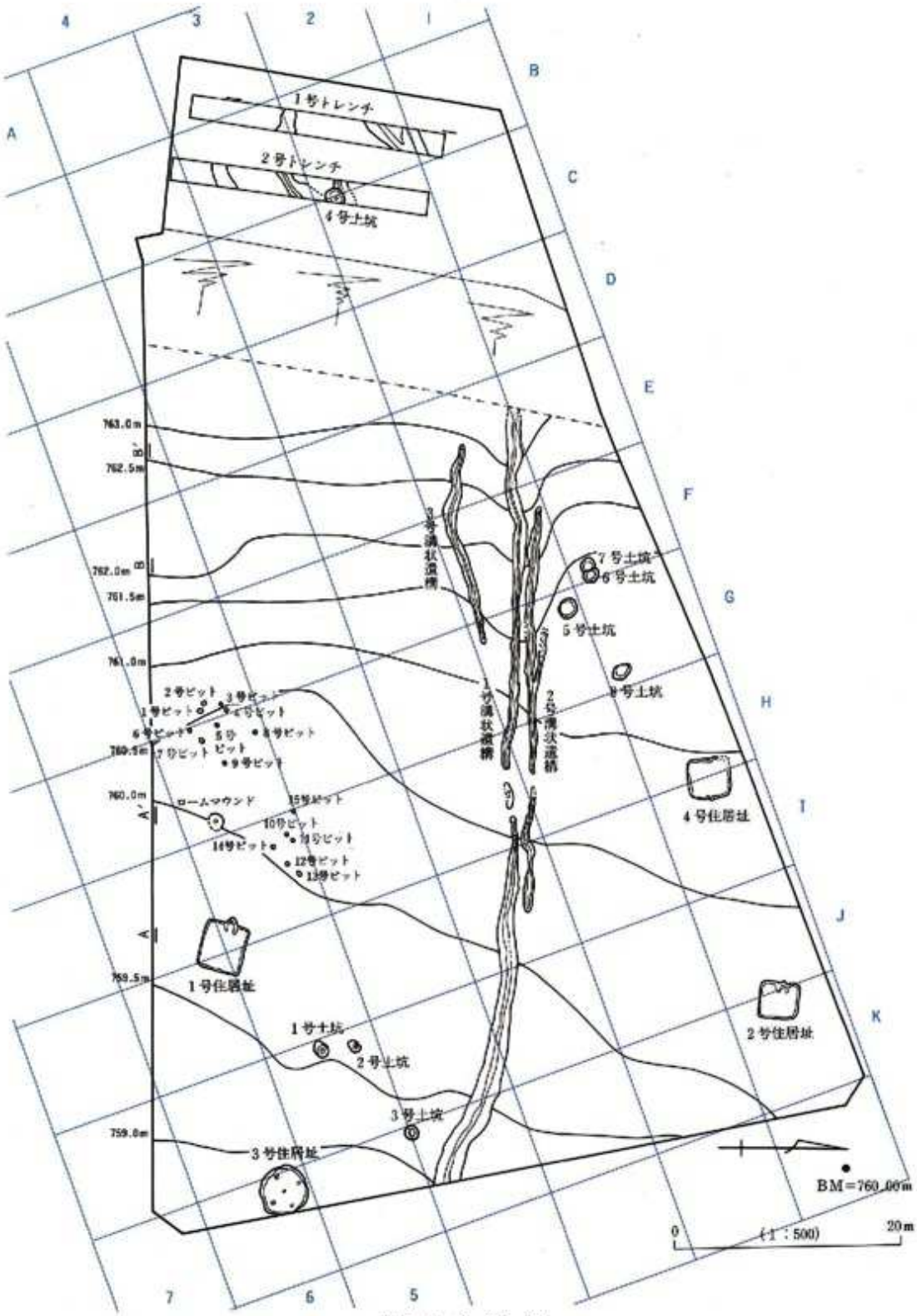
第１節　調査方法と結果概要

今回の調査地は、平成６年度に同事業の第１期工事に先立って実施した、本遺跡の第１次発掘調査箇所（対象面積4,000㎡）の南側隣接地にあたり、工事対象面積6,000㎡の全面積が調査の対象であった。一帯は、西天竜による土地改良が及ばず、僅かながら南北にうねりを残す、緩やかな自然傾斜地である。現在、胡桃・梅の林、雑穀・野菜の畑作地等が一帯の土地利用であるが、かつては松や雑木が生い茂る、地元ではこの一帯を「山」と呼ぶ森林地帯であった（第３図）。

調査の手始めとして、第１次調査の土層堆積状況を参考とし、遺構と遺物の有無及びその分布を探るため、またその結果から本調査対象範囲を定めるための、試掘作業から取りかかった。調査区を南北方向におよそ10m間隔で、トレンチの基準を５ヶ所程設定し、大型バックホーで部分的に土層の変化を確認しながら掘削を行った。その結果、調査地の元地形は、基本的に東部に向かう緩やかな自然傾斜となっているが、西部に向かうほど傾斜がきつくなり、急勾配の段丘部に接続している。また、部分的に起



第４図　調査区設定図（１：2,500）


1号トレンチ
2号トレンチ
4号土坑
763.0m
762.5m
762.0m
761.5m
761.0m
760.5m
760.0m
759.5m
759.0m
2号ピット
3号ピット
1号ピット
4号ピット
6号ピット
5号
8号ピット
7号ピット
ピット
9号ピット
ローム マウンド
15号ピット
10号ピット
14号ピット
11号ピット
12号ピット
13号ピット
1号住居址
1号土坑
2号土坑
3号土坑
3号住居址
3号溝状遺構
1号溝状遺構
2号溝状遺構
7号土坑
6号土坑
5号土坑
8号土坑
4号住居址
2号住居址
BM=760.00m
0
(1:500)
20m

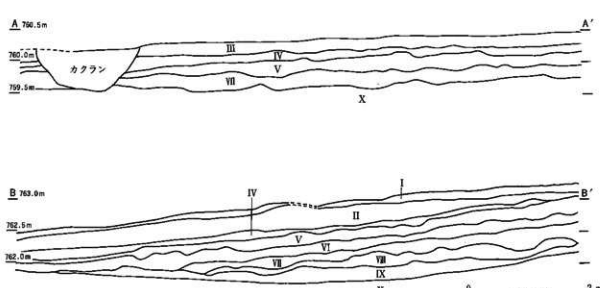
第5図 全 体 図

伏が波状に見られる箇所もあり、起伏の頂部と思われる箇所はテフラ及びその下の礫層部が露出したり、谷部と見られる箇所は黒色土（V層）の堆積が厚く、遺構の確認作業には非常に困難を要した。そして表土の除去は、地形の傾斜を考慮した上で、試掘で検出した1号住居址と溝状遺構の検出面を平坦面とした仮定に基づき、その直上までの表土を大型バックホーで剝ぎ取り、その後は手作業により詳細な遺構上面確認作業及び遺構内覆土の除去作業を行い、並行して断面測量、写真撮影・平面測量等の記録作業の手順で進めた。遺構は、種別ごとに検出順で番号を付けた（第5図）。

グリッドは、事業の設計段階で設置した10m間隔の基準杭をそのまま利用しグリッドを組んだ。そのためグリッドの軸はおよそN-20°-W方向に振れている。そして南北方向を数字で、東西方向をアルファベットで呼称し、遺構の検出位置を確認した。記録作業における標高は、調査区の東部の道路面に既にある、標高移動が済んでいる工事用の基準点をベンチマークとして利用した（760.00m）。

第2節　土層堆積状況

Ⅰ層－暗褐色土（10YR3/3）耕作土等の表土。ローム（テフラ）粒子を50%含む。
Ⅱ層－褐　色　土（10YR4/4）土地改良工事によるものと思われる人為的堆積土。
Ⅲ層－黒褐色土（10YR2/3）ローム粒子を5%含む。
Ⅳ層－黒　色　土（10YR2/1）
Ⅴ層－黒　色　土（10YR1.7/4）
Ⅵ層－黒褐色土（10YR2/3）遺構（平安時代）確認層。径1cmの礫を5%含む。
Ⅶ層－黒褐色土（7.5YR2/2）遺物（縄文土器）包含層。ローム粒子を5%含む。
Ⅷ層－黒　色　土（10YR2/1）
Ⅸ層－極暗褐色土（7.5YR2/3）X層の漸移層。ローム粒子を30%含む。
X層－明黄褐色土（10YR6/8）一般的に本地域では、ローム層または赤土と呼ばれる火山灰土層（テフラ）。



第6図　土層断面図

第Ⅳ章　遺構と遺物

第1節　住　居　址

1号住居址

遺構（第7図）　調査区の南東部、H－5・6、I－5・6グリッドに位置する。4.3×3.8mの検出規模で、やや主軸方向に縦長の方形を呈するプラン形状であり、カマドが南西壁の中央に位置し、主軸は地形の傾斜にほぼ添うものでN-50°-Wを指す。覆土は3分層でき、どの層もローム粒子が混入しており、ほぼレンズ状となる自然堆積の状況を観察した。

床は、部分的に堅固な貼床が残存していたが、そのほとんどが覆土と同質の暗褐色土で締まりがなく、貼床の残骸と思われる粘土のブロックまたは粒子がまばらに含まれていた。

壁残高は25～30cmを測り、プラン検出面から床までほぼ垂直に掘り込まれる。また周溝は、恐らく壁下全域に巡っていたと推察するが、床の残存状況が悪いためか、部分的な検出に至った。

カマドは、袖部に縦長の石材とロームを主体とする粘土で構成された「石芯粘土カマド」である。火焼部は炊き口から中央付近まで顕著に火熱を受け、堅固で赤褐色を帯びているものの、袖は芯石が部分的に抜き取られ、その位置が確認できる程度の残存状況であった。

遺物（第8図）　須恵器は大甕（1）、土師器は長胴甕（2）、ロクロ成形の甕（3）が出土しており、食器の存在がまったくなく、全体的な出土量も少なかった。

出土土器の諸特徴から、本址は平安時代初頭に時期判定を考える。

2号住居址

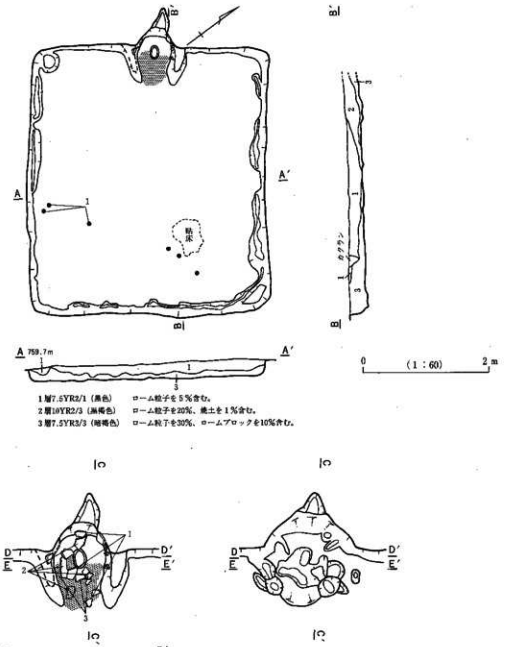
遺構(第9図)　調査区の北東部、J－1、K－1グリッドに位置する。主軸はN-52°-Wを指し、3.2×3.4mで、1号住居址より規模が小さい。プラン形状は方形を呈し、カマドは北西壁のほぼ中央に構築される。覆土は5分層され、全体的にローム粒子が混入する。また、床面に近いレベルから、本址の中央付近に、砂岩を主体とした拳から人頭大の礫を102個検出した。そのおよそ3分の1が火熱を受け、赤褐色に変色していた。

床は、ほぼ全体的に2～5cm程度の厚さで、にぶい黄褐色と黒褐色粘土による貼床がなされ、カマドの前方はかなり堅固であったが、ほとんどにやや軟弱さが感じられた。

壁残高は40～45cmあまりで深く、プランから床までほぼ垂直に落ち込む。周溝は、北西壁を除き「コ」の字状に巡らされる。また柱穴に相当するピットは存在しない。

カマドは、残存状況のよい「石芯粘土カマド」で、床面に近い内部全域から長胴甕及び甕が破損した状況で出土している。覆土からは、天井部を形成していたと推察できる褐色粘土のブロックが混入する。床面中央付近に火焼部があり、土器を支えたと考えられる「脚石」が確認できた。また、袖部内面には芯石の側面が露出し、それがカマドの火焼面の一部となっており、石材もその箇所だけ火熱を受け赤褐色を帯びていた。

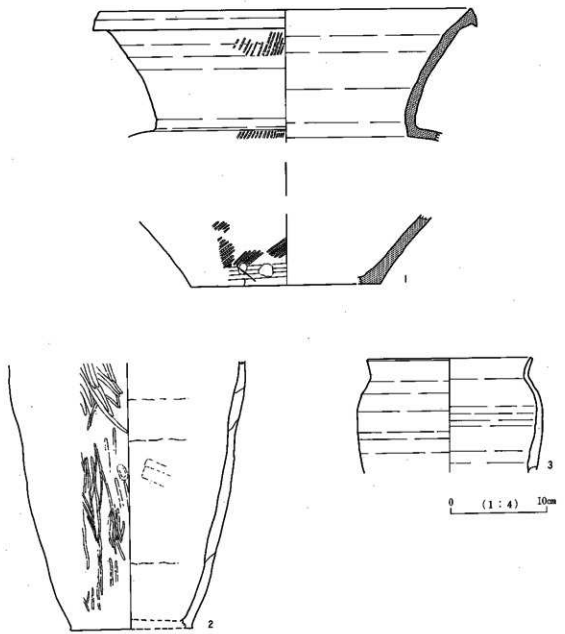
遺物（第10図）　須恵器は坏（1～3）が、土師器は甕（4）、長胴甕（5・6）が、カマド内部を中



1層7.5YR2/1（黒色）　ローム粒子を5％含む。
2層10YR2/3（黒褐色）　ローム粒子を20％、焼土を1％含む。
3層7.5YR3/3（暗褐色）　ローム粒子を30％、ロームブロックを10％含む。

1層7.5YR2/2（黒褐色）　粘土ブロックを3％、焼土粒子を3％含む。
2層7.5YR3/2（黒褐色）　粘土を10％、粘土ブロックを10％、ローム粒子を3％含む。
3層7.5YR1.7/1（黒色）
4層7.5YR3/4（にぶい褐色）　粘土ブロックを50％以上含む。
5層7.5YR3/2（黒褐色）　2層に同じ。
6層10YR4/4（褐色）　焼土を50％以上含む。
7層5YR3/4（暗赤褐色）　焼成を受けた粘土層。
8層7.5YR2/2（黒褐色）　粘土ブロックを5％含む。
9層7.5YR3/3（黒褐色）　ローム粒子を3％含む。
10層7.5YR3/4（黒褐色）　焼土ブロックを5％、ローム粒子を3％含む。
11層7.5YR6/6（橙色）　焼土ブロックを10％、ローム粒子を30％含む。
12層5YR6/2（灰オリーブ色）
13層10YR6/8（赤橙色）　焼土（火焼部）　ブロック状化粗砂を30％含む。
14層10YR6/4（にぶい黄橙色）　粗砂を40％含む。
15層5YR6/4（オリーブ黄色）　粘土層

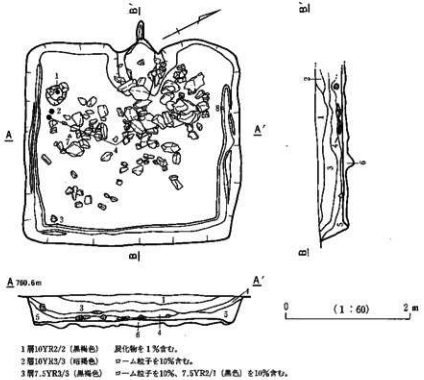
第7図　1号住居址実測図



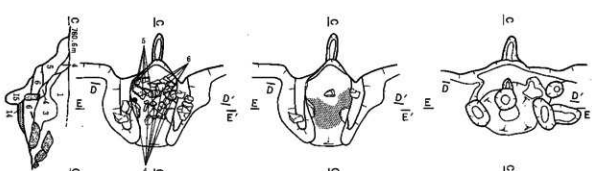
第8図　1号住居址出土土器実測図

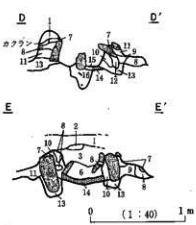
第2表　1号住居址出土土器観察表　（法量－上から口径、底径、高さ　単位cm）

番号	器種	法量	器形の特徴	調整	備考
1	大型甕	39.4 20.0 (14.0)	輪積後ロクロ？　口縁部の歪みが大きい。	外面－タタキ後ロクロナデ 内面－ロクロナデ、ナデ	胎土に小礫を含む。 2.5YR4/8（赤褐色）
2	長胴甕	－ (13.0) (28.3)	胴中位から下位にかけて直線的にすぼまる。	外面－ナデ後ヘラミガキ、底部木葉痕 内面－ヘラナデ、ナデ(痕跡わずか)	胎土に雲母を含む。 7.5YR5/6（明褐色）
3	甕	17.6 － (12.2)	輪積成形後ロクロ？　胴上位に膨らみを持ち、口縁部はやや外反する。	外面－ロクロナデ 内面－ロクロナデ	胎土に雲母、長石を多量に含む。 二次焼成痕あり、すす付着。 7.5YR5/6(明褐色)



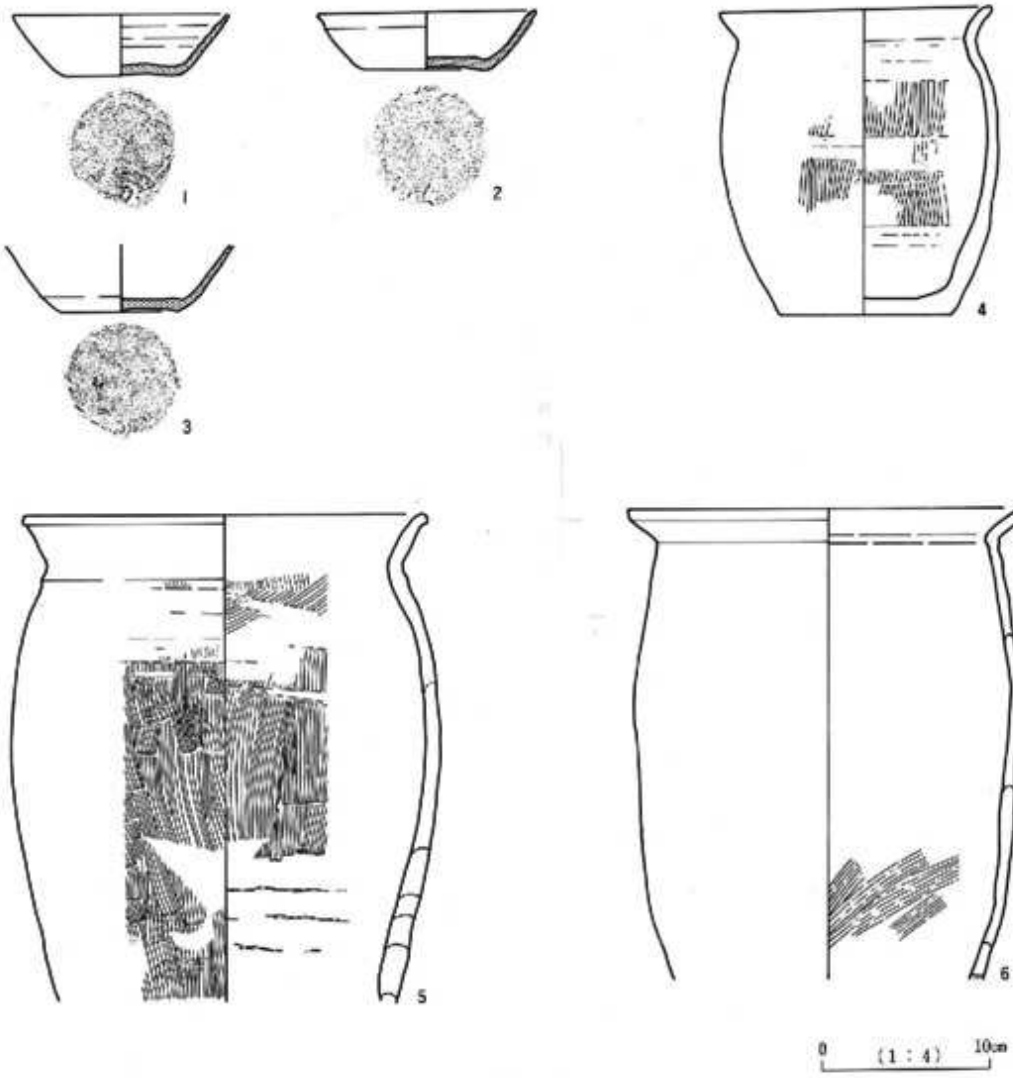
1層10YR2/2（黒褐色）　炭化物を1％含む。
2層10YR3/3（暗褐色）　ローム粒子を10％含む。
3層7.5YR3/3（黒褐色）　ローム粒子を10％、7.5YR2/1（黒色）を10％含む。
4層7.5YR2/1（黒色）　ローム粒子を3％含む。
5層7.5YR3/4（暗褐色）　ローム粒子を30％含む。
6層10YR5/3（にぶい黄褐色）と10YR3/1（黒褐色）の混在する層　ロームブロックを10％含む。





1層5YR2/2（黒褐色）　焼土を10％、炭化物を3％、径2cm以下の礫を3％、径0.1cm以下の細砂を10％含む。
2層5YR1.7/1（黒色）
3層2.5YR3/3（暗赤褐色）　焼土ブロックを15％、炭化材、焼土を5％、ローム粒子を20％、焼土を10％含む。
4層5YR4/6（赤褐色）　ローム粒子を20％、焼土を10％含む。
5層2.5YR2/2（極暗赤褐色）　焼土を10％含む。
6層7.5YR4/6（褐色）　粘土（カマド構築時）層　ローム粒子を50％以上含む。
7層5YR4/8（赤褐色）　焼土を20％、ローム粒子を50％以上含む。
8層7.5Y5/2（灰オリーブ色）　粘土層
9層7.5YR1.7/1（黒色）　ローム粒子を10％含む。
10層7.5YR3/1（黒褐色）　焼土ブロックを5％、ローム粒子を10％含む。
11層10YR6/6（明黄褐色）　焼土を10％、ローム粒子を50％以上含む。
12層5Y5/2（灰オリーブ色）　焼土を5％、炭化物を5％、ローム粒子を5％含む。
13層10YR4/3（にぶい黄褐色）　ローム粒子を20％、ロームブロックを20％含む。
14層10YR6/8（赤褐色）　焼土。
15層5YR6/6（橙色）　ローム粒子を50％以上含む。
16層10YR4/2（灰黄褐色）　ロームブロックを5％、炭化材、土師を含む。

第9図　2号住居址実測図



第10図　2号住居址出土土器・鉄器実測図

第３表　２号住居址出土土器観察表　（法量－上から口径、底径、高さ　単位cm）

番号	器種	法量	器形の特徴	調整	備考
1	坏	(12.6) 6.4 3.5	体部は直線的に外反する。	外面－ロクロナデ、底部回転糸切り 内面－ロクロナデ	胎土に砂粒を含む。 焼き歪みがある。 5Y4/1（灰色）
2	坏	12.9 7.2 3.4	体部は内湾気味に開き、口縁部は外反する。	外面－ロクロナデ、底部回転糸切り 内面－ロクロナデ	胎土に雲母、小礫を含む。 N4/0（灰色）
3	坏	－ 6.8 (3.9)	体部はやや内湾気味に外反する。	外面－ロクロナデ、底部回転糸切り 内面－ロクロナデ	胎土に小礫、砂粒を多く含む。 10R3/3（暗赤褐色）
4	小型甕	16.0 10.0 18.1	口縁部は「弓」なりに外反する。	外面－ハケ、口縁部ヨコナデ 内面－胴中位ハケ・下位ヘラナデ、口縁部ヨコナデ	底部から胴部にかけて、二次焼成を受け、風化が目立つ。胎土に雲母、小礫、砂粒を含む。 10YR5/4（にぶい黄褐色）
5	長胴甕	23.3 － (29.1)	胴中位に膨らみを持つ。	外面－ハケ、口縁部ヨコナデ 内面－胴中・下位ハケ、口縁部ヨコナデ	胎土に雲母、石英、長石、小礫、砂粒を含む。 7.5YR5/6（明褐色）
6	長胴甕	23.8 － (28.1)	胴中位にやや膨らみを持ち、口縁部は「く」の字状に外反する。	外面－ヨコナデ 内面－ヨコナデ、胴下位ナデ	胎土に小石を多く含む。 内外面に炭化物付着。 5YR4/6（赤褐色）

第４表　２号住居址出土鉄器観察表　（法量－上から長さ、幅、厚さ　単位cm）

番号	器種	法量	重さ(g)	特徴
7	ピンセット状鉄器	7.6 0.6 0.2	5.6	鉄板を折り曲げて、摘み部を作り出している。
8	刀子	18.4 1.2 0.4	31.0	平棟平造り。柄部は木質が残存し、茎の上をさらに鉄板で被っているのでは？ 刀部は中心に向かって弓なりに湾曲している。

心に出土している。また鉄器も、床面直上から刀子（８）、ピンセット状鉄器（７）が出土している。特に８の刀子は、鞘を受ける茎が鉄板で作出され、柄の木質が錆の進行でほとんど原形で残るのも、鉄板で木質を覆っていることによる可能性が指摘される。

これらの出土遺物の諸特徴から、本址は平安時代初頭に時期判定を考える。

３号住居址

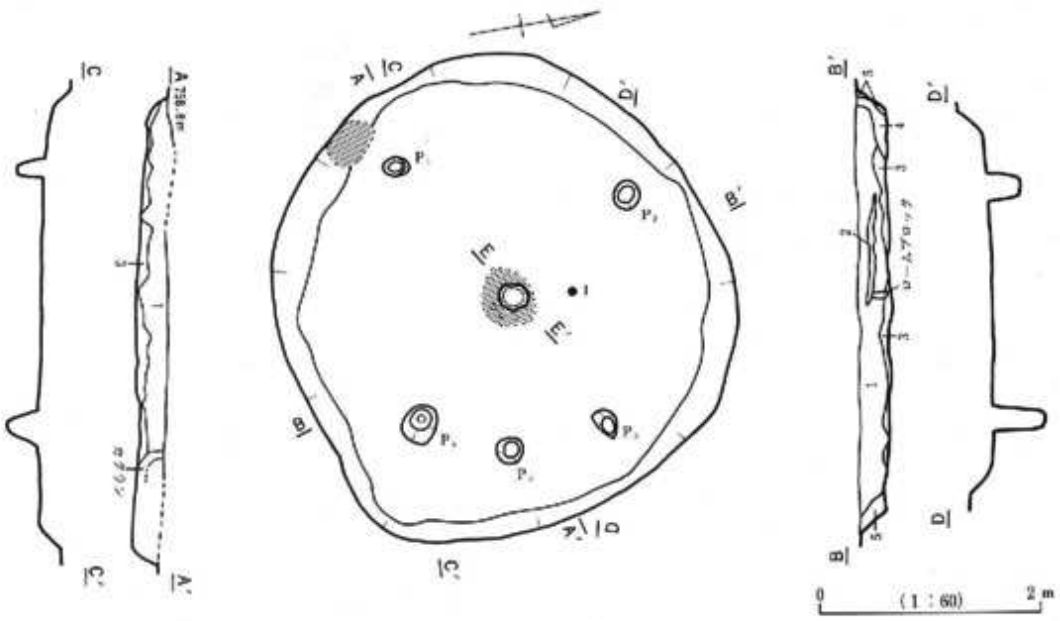
遺構（第11図）　調査区の南東部、Ｊ－６、Ｋ－６グリッドに位置する。平面は、円形を呈するプラン形状で、直径4.0～4.3mの規模である。竪穴はレンズ状に掘り込まれ、壁の立ち上がりはなだらかな傾斜を呈している。またその一部に火焼状況を示す痕跡もみられた。

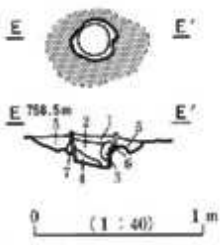
炉は本址のほぼ中央に位置し、土器の上半部を転用した埋甕炉である。また炉の周囲は、火熱により床面が赤褐色に変色していた。

床の状態は、掘り込み面をほぼ全域に固く叩き締めて造作され、壁に近くなるほど軟弱化していく。

覆土は５層から構成されるが、ローム粒子及び炭化物の混入が特徴といえる。

柱穴は、炉を中心とした４穴（P_1～P_4）が放射状に壁前に配置され、P_3とP_4の中間にそれより浅め

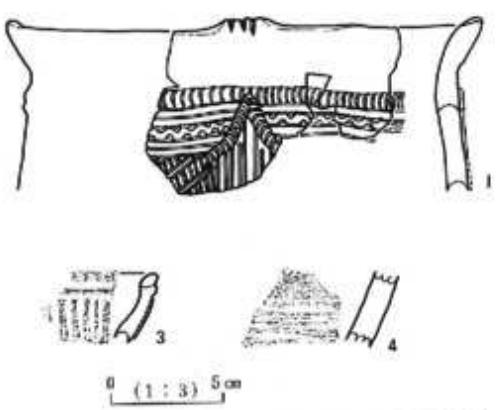


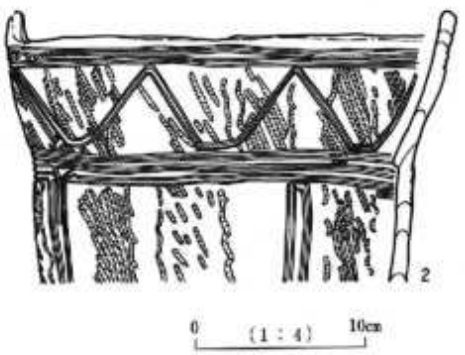


1層10YR2/3（黒褐色）　ローム粒子を10%、炭化物を1%含む。
2層10YR2/2（黒褐色）　ローム粒子を10%、炭化物を1%、土器を1%含む。
3層10YR4/4（褐色）　ローム粒子を20%、炭化物を1%含む。
4層10YR3/4（暗褐色）　ローム粒子を30%含む。
5層10YR4/4（褐色）　ローム粒子を50%以上含む。

1層7.5YR3/2（黒褐色）　ローム粒子を10%含む。
2層7.5YR3/4（暗褐色）　ローム粒子を20%、炭化物を3%、焼土を3%含む。
3層7.5YR5/8（明褐色）　ローム粒子を80%以上含む。
4層7.5YR4/4（褐色）　ローム粒子を30%含む。
5層10YR3/2（黒褐色）　ローム粒子を10%、炭化物を3%含む。
6層10YR4/6（褐色）　焼土（ローム粒子が焼けたもの）
7層10YR2/2（黒褐色）　ローム粒子を10%含む。

第11図　3号住居址実測図





第12図　3号住居址出土土器実測図及び拓影図

第５表　３号住居址出土土器観察表　（法量－上から口径、底径、高さ　単位cm）

番号	器種	法量	文様	調整(内面)	胎土	色調	備考
1	深鉢	28.0 － (10.3)	半截竹管状工具による沈線、隆帯文	ナデ	雲母を多く含む	2.5YR4/6 (赤褐色)	五領ヶ台式 炭化物付着
2	深鉢	22.5 － (16.0)	半截竹管による沈線と列点文、無節ＬＲ縄文及び結節縄文による文様構成	ナデ（二次焼成により部分的に風化）	小礫を多く含む	2.5YR4/6 (赤褐色)	五領ヶ台式

の小穴P_2がみられる。

遺物（第12図）　土器は深鉢（１・２）、石器は磨製石斧がみられ、その出土量は少ない。

土器の特徴から本址は、縄文時代中期初頭に時期判定を考える。

４号住居址

遺構（第13図）　調査区の北部、Ｈ－１、Ｉ－１グリッドに位置する。主軸はＮ-95°-Ｅを指し、3.5×3.7mの規模で、プラン形状は方形を呈するが、北西コーナーは攪乱を受けていた。カマドは東壁のほぼ中央に構築され、その左脇には小穴が存在する。覆土は１層のみを確認した。また覆土中には、炭化物やローム粒子等の混入物があまりみられなかった。

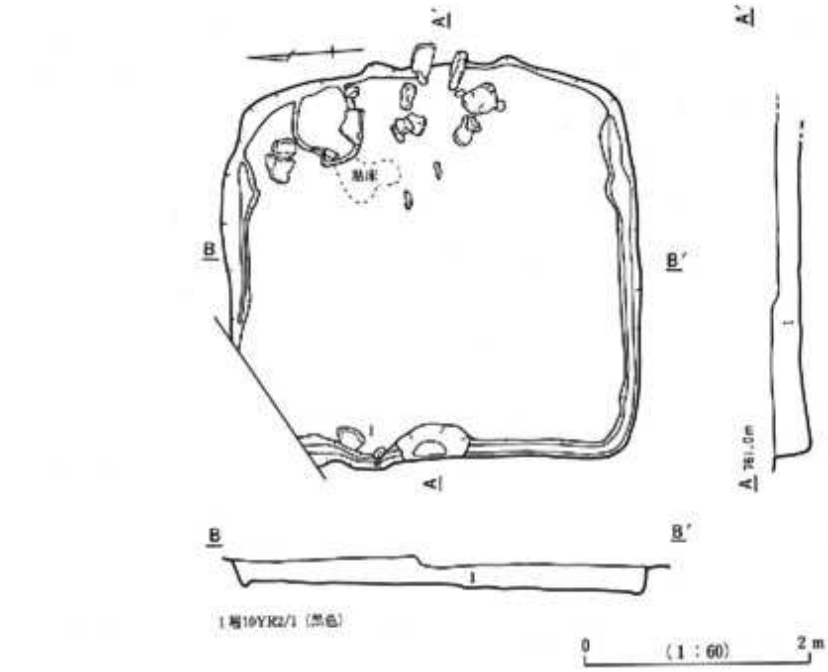
床面は、カマドの前方に僅かながら黄褐色粘土による貼床の痕跡を示す堅固な面を残すのみで、全体的に覆土と変化の少ない軟弱な黒色土と、礫を多量に含む褐色土の地山が露出し、床のレベルとして捉えた。

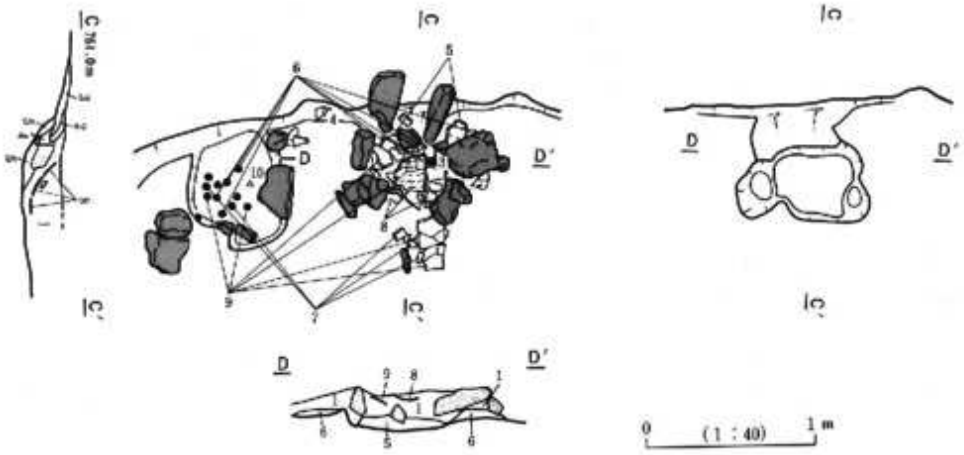
壁残高は20～30cmあまりで、近接する２号住居址と比べ掘り込みは浅い。壁下の周溝は、２号住居址と同じく、カマドがある東壁を除き「コ」の字状に巡らされる。また柱穴に相当するピットは存在しない。

カマドは、袖部に用いられる粘土がまったくなく、平坦な面を持つ石材を列状に立てて袖部を形成した、石材のみで構成される「石組みカマド」であるものと推察する。また、石材の何点かがカマドの外部に倒れており、その下部には石材を固定したと考えられる地山の窪みも確認している。更に、カマドの内部及び前方部からは、長胴甕等の５個体以上の土器が、破損した状況で出土し、それらと接合する土器片をカマドの左側に位置する小穴内からも検出している。

遺物（第14図）　土師器は内面黒色処理を施す坏（１～３）、そうでない坏（４）、甕（５・６）、長胴甕（７～９）が、カマド内と小穴を中心に出土しており、覆土からの出土量は破片としても少ない。特に６の甕は、形状、調整、胎土、焼成の観察から、他の物とは異質な特徴を持ち、他地域からの流入品の疑いを示唆したい。また小穴内から、鉄滓がある銅鍔と思われる銅製品が１点出土している。

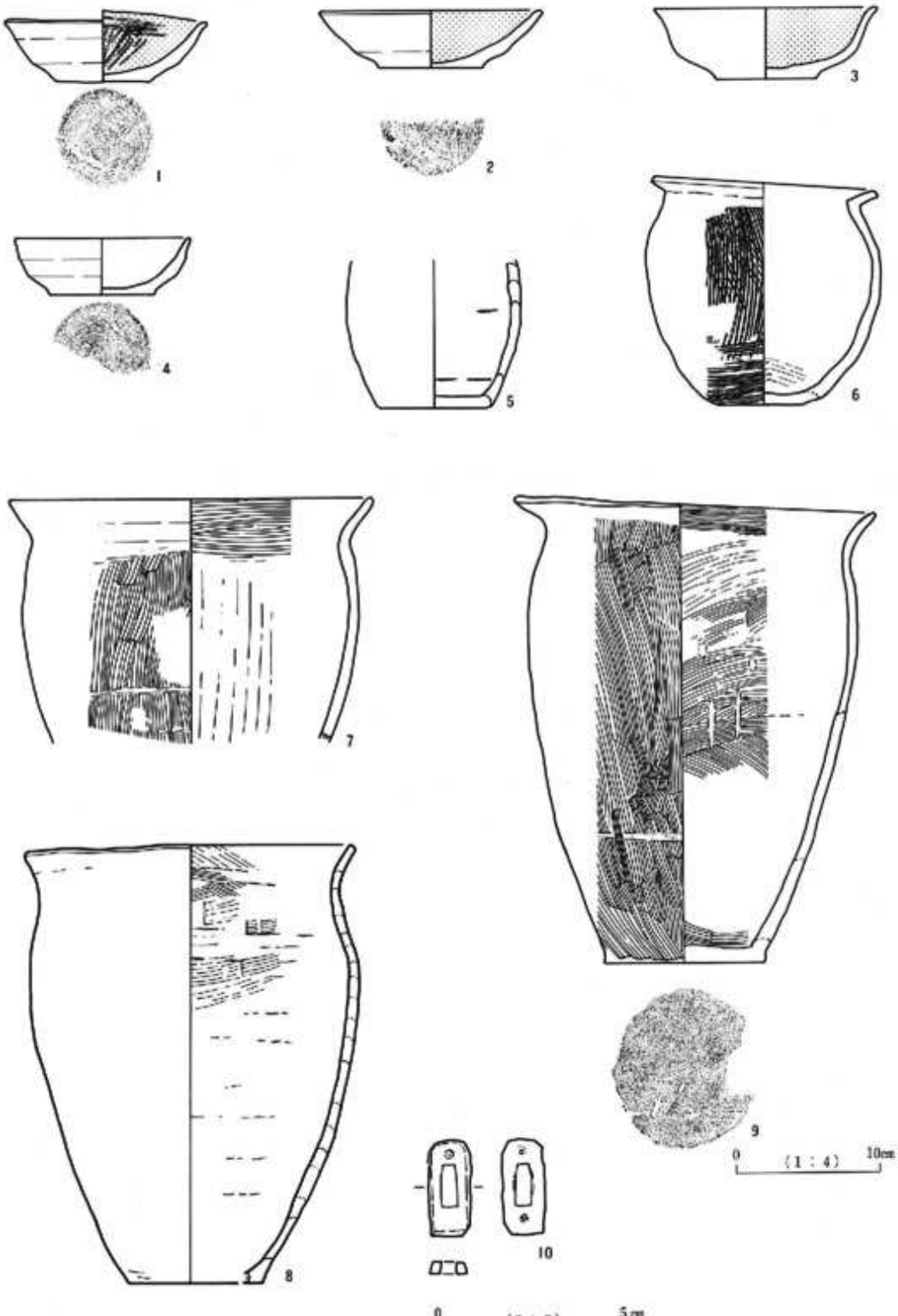
本址は平安時代初頭に時期判定を考えるが、これら出土土器の諸特徴から、２号住居址より後出するものと考える。





1層10YR2/1（黒色）
2層2.5YR5/8（明赤褐色）　焼土
3層10YR3/2（黒褐色）
4層10YR5/6（黄褐色）　ローム
5層10YR4/4（褐色）　地主ブロックを20%、細砂を40%、小礫を10%含む。
6層10YR5/6（黄褐色）　ローム粒子を30%含む。

第13図　4号住居址実測図



第14図　4号住居址出土土器・金属器実測図

第6表　4号住居址出土土器観察表　（法量－上から口径、底径、高さ　単位cm）

番号	器種	法量	器形の特徴	調整	備考
1	坏	14.0 6.4 5.0	体部はやや内湾気味に開き、口縁部は外反する。	外面－ロクロナデ、底部回転糸切り「＋」の字ヘラ記号 内面－ロクロナデ、ヘラミガキ黒色処理	胎土に雲母を多く含む。焼成時によるものか？　歪みあり。 7.5YR7/8（黄橙色）
2	坏	15.4 7.4 4.0	体部はやや内湾気味に外反する。	外面－ロクロナデ、底部回転糸切り 内面－ヘラミガキ、黒色処理	10YR7/2（にぶい黄橙色）
3	坏	15.6 7.0 5.0	体部は内湾気味に開き、口縁部は外反する。	外面－ロクロナデ、底部回転糸切り 内面－ヘラミガキ、黒色処理	7.5YR6/4（にぶい橙色）
4	坏	12.2 7.2 4.0	体部は内湾気味に外反する。	外面－ロクロナデ、底部回転糸切り 内面－ヘラミガキ？	胎土に雲母、砂粒を含む。 10YR5/4（にぶい黄褐色）
5	小型甕	－ 7.4 (10.2)	輪積成形。	外面－ハケ 内面－ハケ	5YR4/4（にぶい赤褐色）
6	小型甕	15.3 5.9 16.0	輪積成形。口縁部は短く強く外反する。	外面－櫛状工具によるカキ目、口縁部ヨコナデ 内面－ナデ、ヘラナデ	小礫粒を多量に含む乳白色の胎土。外面下部二次焼成。内面下部炭化物付着。 5YR7/1（明褐灰色）
7	甕	25.0 － 17.0	輪積成形。胴中位に膨らみを持つ。口縁部は「く」の字型に外反する。	外面－ハケ、口縁部ヨコナデ 内面－ナデ、口縁部ハケ	5YR4/8（赤褐色）
8	長胴甕	22.5 9.3 30.4	輪積成形。胴上位に膨らみを持ち底部まで直線的にすぼまる。口縁部は弓なりに外反する。	外面－ナデ（一部ヘラナデ） 内面－口縁～胴上位うすいハケ、ナデ	5YR5/6（明赤褐色）
9	長胴甕	32.5 25.2 11.0	輪積成形。胴上位に膨らみを持ち底部まで直線的にすぼまる。口縁部は短く強く外反する。	外面－ハケ、口縁部ヨコナデ 内面－ハケ	2.5YR4/8（赤褐色）

第7表　4号住居址出土金属器観察表　（法量－上から長さ、幅、厚さ　単位cm）

番号	器種	法量	重さ(g)	特徴
10	銅錆	2.5 1.1 0.4	2.8	表面は長方形で、断面は台形を呈し、ほぼ中央部に長方形の穿孔を有する。裏面には、穿孔部と短縁部の中ほどそれぞれに鋲痕を確認できる。

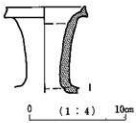
第2節　溝状遺構

遺構（第16・17図）　調査地の西部から東部にかけ、E－2からK－4グリッドの範囲で、3条の溝状遺構を検出した。部分的に検出不能な箇所はあったものの、直線距離でおよそ70mにわたって検出できた1号溝状遺構は、地形の傾斜にほぼ直行しながらも傾斜の変化に応じて緩やかなカーブを描いている。残存状態の良好なK－4グリッドでは、平面の検出幅が1.8～2.1m、深さは40～50cmに達し、法面の傾斜はさほどきつくはないが底幅が5～15cmあまりで、断面形が「V」字状を呈している。また覆土

を観察すると、遺構の上部ほどローム粒子を含む黒色土が堆積し、下部に至るほど細砂及び小礫の含まれる割合が高くなり、箇所によってはそれらのみで構成される層も確認できる。また、2・3号溝状遺構の覆土の特徴も、1号溝状遺構のそれと大きな変化はみられない。

よってこれらの状況から本遺構は、沢または小河川としての自然流路跡と考えられる。また2及び3号溝状遺構は、主流とする1号溝状遺構に吸収される支流に当たるものであろう。

遺物（第15図）　須恵器は坏、長頸壷（1）が、土師器は内面黒色処理を施す坏、甕等が出土し、いずれも小破片でその量も乏しい。また、縄文前期末、中期、後期の土器片と黒曜石も出土している。



第15図　1号溝状遺構出土土器実測図

第8表　1号溝状遺構出土土器観察表　（法量－上から口径、底径、高さ　単位cm）

番号	器種	法量	器形の特徴	調整	備考
1	長頸壷	8.1 — (9.1)	頸部からほぼ直線的に立ち上がり、口縁部は「く」の字に外反する。	外面－ロクロナデ 内面－ロクロナデ	胎土に小礫、砂礫を含む。 7.5R6/1（赤灰色）

第3節　土　　坑

遺構（第18図）　土坑は8基検出した。平面の形状、掘り込みによる断面形及び内部構造等の特徴により、3つのタイプに細分される。なお、遺物は出土していない。

Aタイプ（2・3・8号）

断面が半円形を呈し、底面と壁面の境界が不明確なもの。

Bタイプ（5・6・7号）

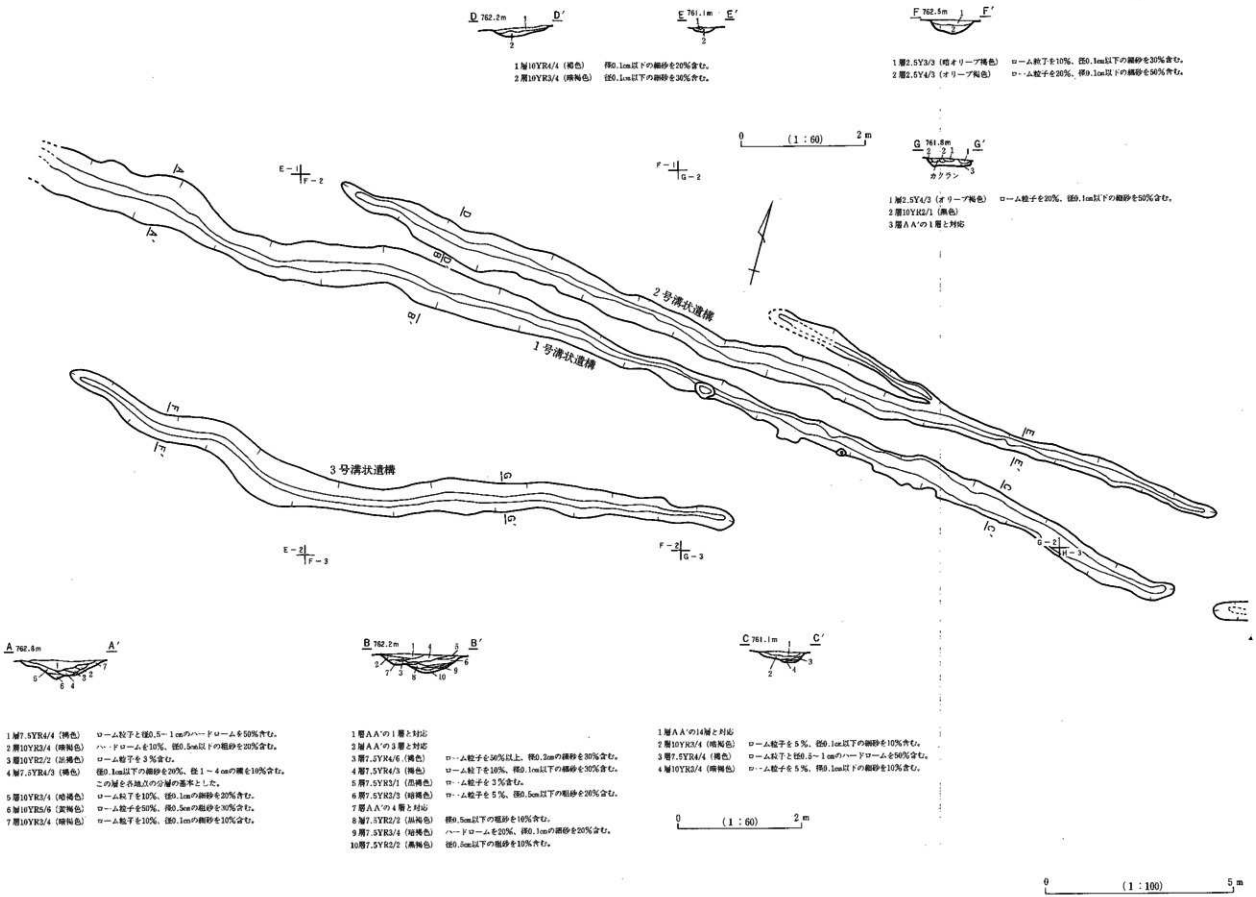
平面が比較的整った円形で、底面も平坦で整った円形を呈するもの。

Cタイプ（1・4号）

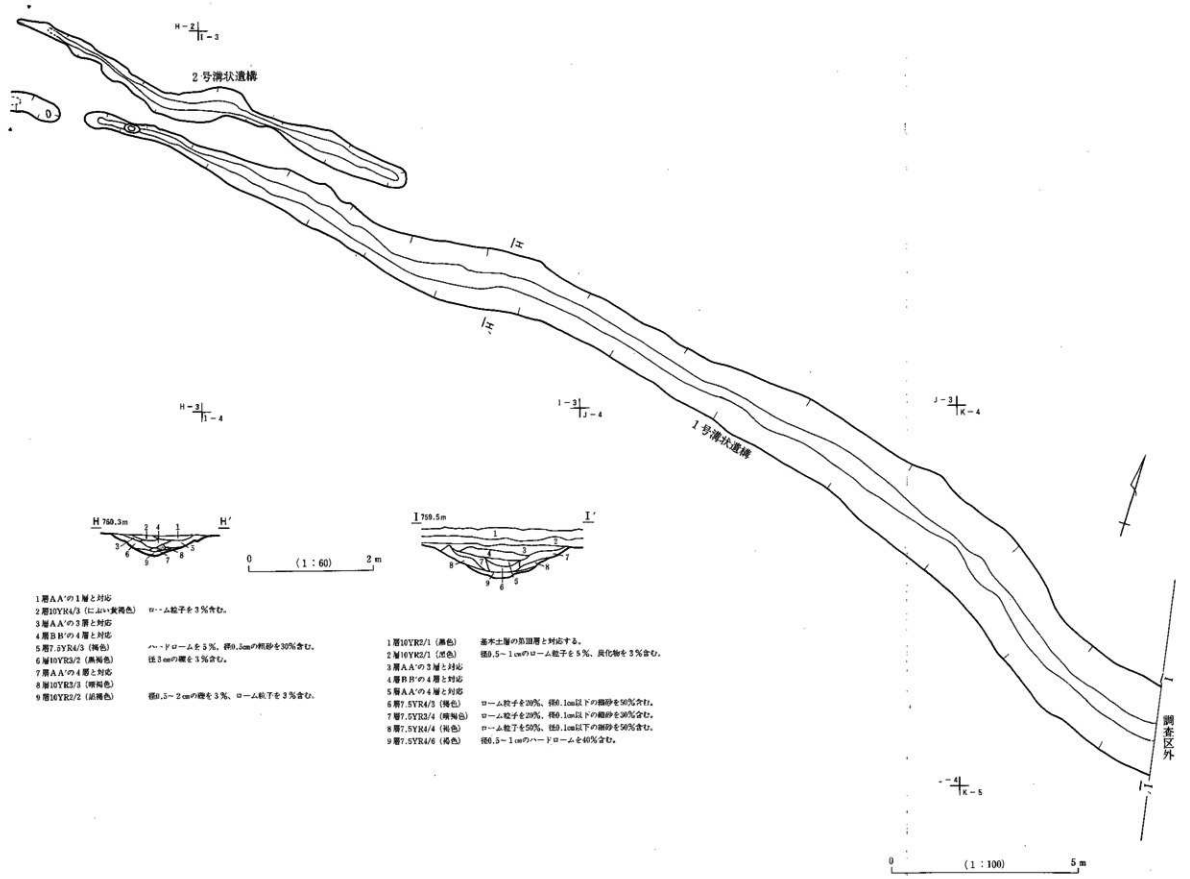
平面は楕円ないし隅丸長方形で、底面が平坦で更にその中央部に直径5～10cmの小穴が設けられる。壁面は傾斜して下がり始め、陵を持って垂直に落ち込む。これらの状況から、本タイプは「落し穴」と呼ばれる土坑と思われる。これと同様の特徴を示すものは、第1次調査でも確認されている。

第4節　ピ　　ッ　　ト

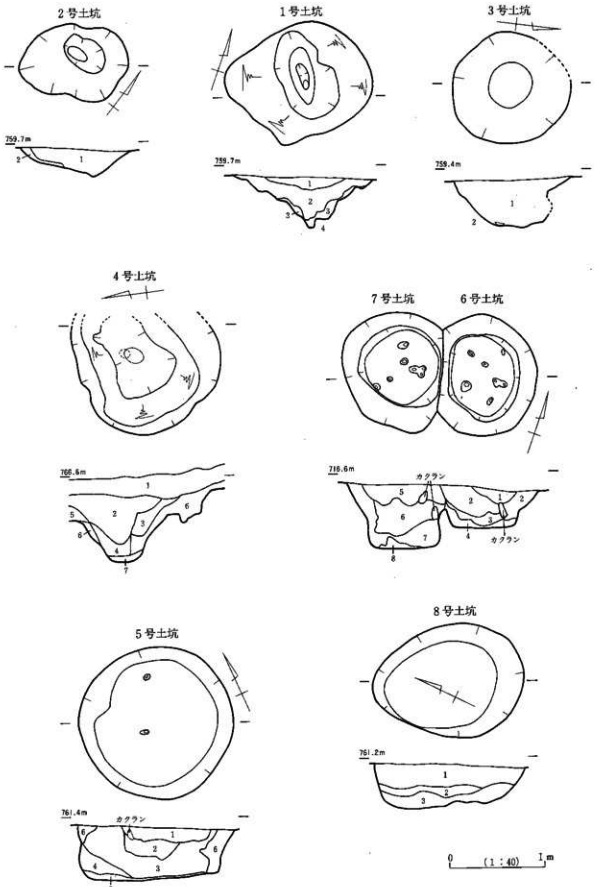
遺構（第19図）　土坑より小規模の竪穴をピットとして種別した。本調査区では、F－5、G－5、H－5グリッドに集中した状況で検出し、「群」を形成しているともうかがえる。平面は円形でその規模もほぼ一定し、黒色ないし黒褐色の単一土の堆積であるが、深さにややばらつきがみられる。各ピット間の組み合わせにより、掘立柱建物址が切り合う可能性が指摘できる。なお、遺物の出土はなかった。



第16図　溝状遺構実測図１



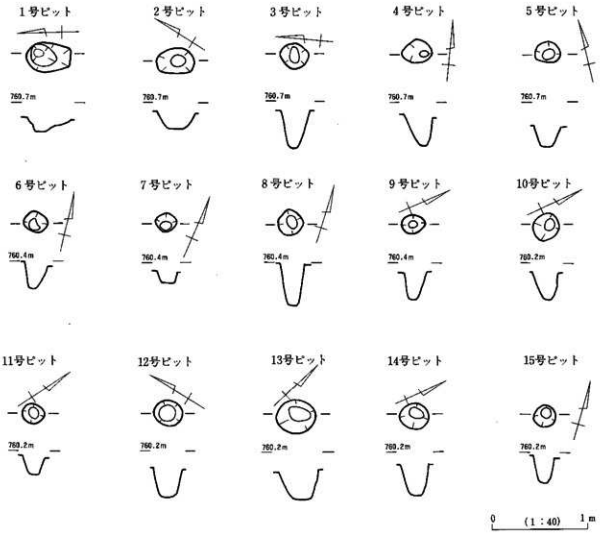
第17図　溝状遺構実測図2


2号土坑
759.7m
1号土坑
759.7m
3号土坑
758.4m
4号土坑
766.6m
7号土坑
6号土坑
719.6m
カクラン
カクラン
5号土坑
761.4m
カクラン
8号土坑
761.2m
0 (1:40) 1m

第18図　土坑実測図

第9表　土坑一覧表　（規模法量―上から長径、短径、深さ　単位cm）

番号	平面形	断面形	規模	覆土	締まり	粘性	備考
1	楕円形	逆三角形	157 117 55	1層10YR3/3（暗褐色）　ローム粒子を10%、径0.1cm以下の細砂を20%含む。 2層7.5YR3/3（暗褐色）　ローム粒子を20%、径0.2cm以下の細砂を20%、ハードロームブロックを5%含む。 3層7.5YR4/4（褐色）　ローム粒子を30%、径0.2cm以下の細砂を20%含む。 4層7.5YR5/8（明褐色）　ローム層	中 強 強	中 強 強	落し穴
2	楕円形	台形	116 72 32	1層7.5YR2/2（黒褐色）　ローム粒子を10%、炭化物を5%含む。 2層7.5YR3/3（暗褐色）　ローム粒子を30%含む。	強	中	
3	円形	半円形	125 118 54	1層7.5YR2/2（黒褐色）とロームブロックの混在するカクラン	弱	弱	
4	不整形	二段構造	－ (145) 75	1層7.5YR3/2（黒褐色）　上部に5YR3/2（暗赤褐色）を50%以上含む。 2層7.5YR1.7/1（黒色）　径3cmのロームブロックを3%、径0.2cm以下の細砂を30%含む。 3層10YR2/3（黒褐色）　ローム粒子を30%、径0.2cm以下の細砂を30%含む。 4層10YR2/2（黒褐色）　ローム粒子を20%、径0.2cm以下の細砂を30%含む。 5層7.5YR4/4（褐色）　ローム粒子を50%、径0.2cm以下の細砂を40%含む。 6層10YR4/4（褐色）　ローム粒子を40%、径1～5cm以下のロームブロックを30%含む。 7層10YR3/2（黒褐色）　ローム粒子を10%含む。	弱 強 強 中 強 強 強	中 強 強 強 強 強 強	落し穴
5	円形	台形	164 161 59	1層10YR1.7/1（黒色）　ローム粒子を10%含む。 2層10YR1.7/1（黒）　ハードロームブロックを10%含む。 3層10YR2/3（黒褐色）　ローム粒子を20%含む。 4層10YR1.7/1（黒色）　ローム粒子、ロームブロックを20%含む。 5層10YR4/4（褐色）　ローム粒子、ロームブロックを50%以上含む。 6層10YR4/6（褐色）　ローム粒子を50%以上含む。	中 弱 強 中 強 強	強 強 強 強 強 強	
6	円形	二段構造	124 (100) 45	1層7.5YR3/1（黒褐色）　ローム粒子を5%以下含む。 2層7.5YR4/3（褐色）　ローム粒子を30%含む。 3層7.5YR3/1（黒褐色）　ローム粒子を5%以下含む。 4層10YR4/4（にぶい黄褐色）　ローム粒子を50%含む。	中 中 中 中	中 中 中 中	
7	円形	二段構造	130 (110) 68	5層7.5YR3/1（黒褐色）　ローム粒子を30%含む。 6層7.5YR3/1（黒褐色）　ローム粒子を20%含む。 7層10YR4/4（にぶい黄褐色）　ローム粒子を50%含む。 8層7.5YR4/1（褐灰色）	中 中 中 強	中 中 中 強	
8	楕円形	台形	159 118 45	1層10YR3/2（黒褐色）　ローム粒子を1%以下含む。 2層10YR5/3（にぶい黄褐色）　ローム粒子を10%含む。 3層10YR6/6（明黄褐色）　ローム粒子を50%含む。	中 中 中	中 中 中	



第19図　ピット実測図

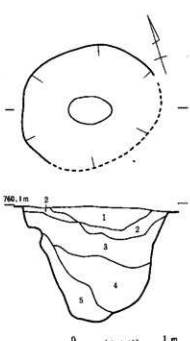
第5節　ロームマウンド

1号ロームマウンド

遺構（第20図）　調査区の南部、G－5グリッドに位置する1基のみの検出であった。

範囲確認作業により、円形を呈する土坑の覆土上部に、ソフトロームを主体とする褐色土が一定の範囲と厚さを持って検出したことから他の検出例にならい、ロームマウンドとして土坑と種別した。

遺物　遺物の出土はなかった。



第20図　ロームマウンド実測図

第10表　ピット一覧表　（規模法量―上から長径、短径、深さ　単位cm）

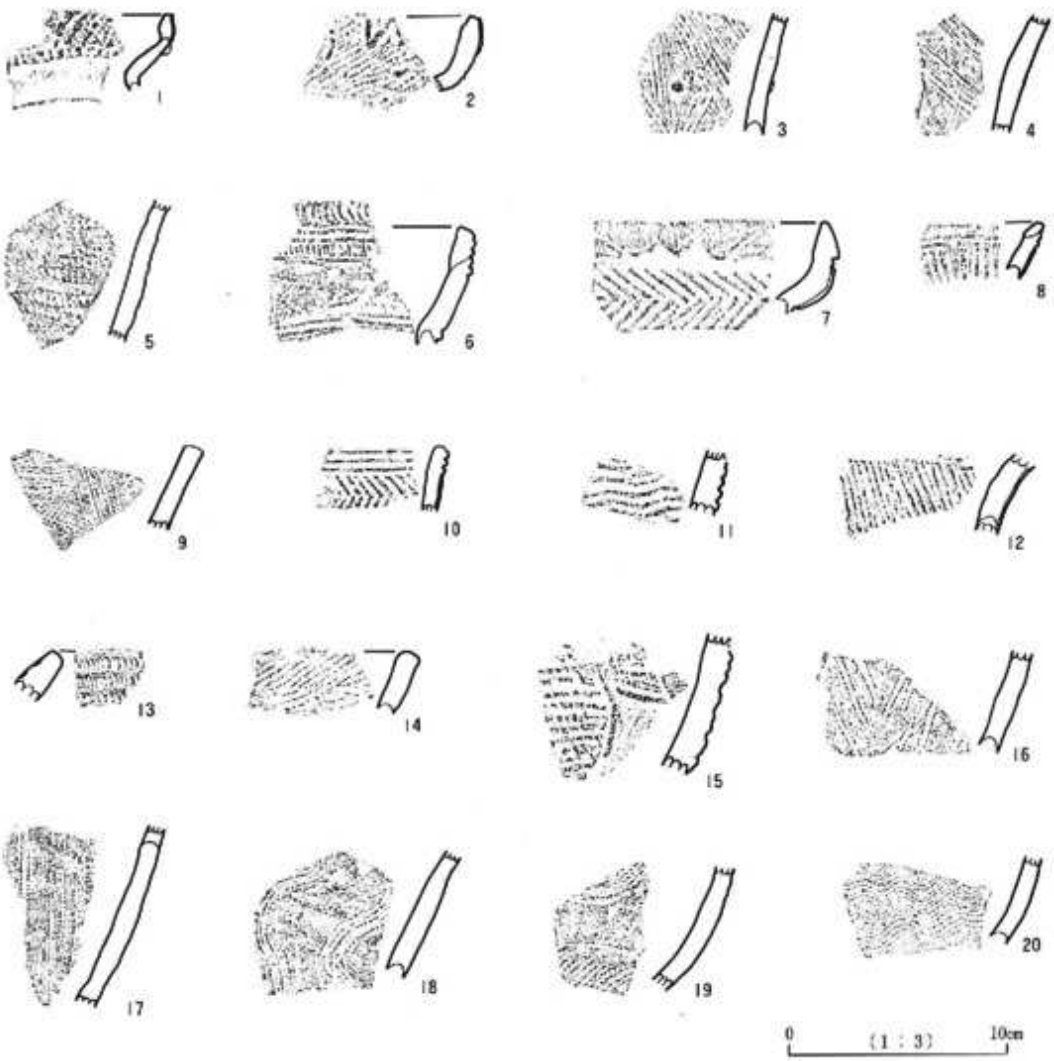
番号	平面形	断面形	規模	覆土	締まり	粘性	備考
1	不整形	不整形	48 30 32	1層5YR1.7/1（黒色）	弱	中	
2	楕円形	台形	40 27 20	1層5YR1.7/1（黒色）	強	強	
3	楕円形	台形	31 27 40	1層5YR1.7/1（黒色）	中	中	
4	楕円形	台形	32 25 32	1層5YR1.7/1（黒色）	中	中	
5	円形	台形	27 21.5 22	1層5YR1.7/1（黒色）	中	中	
6	不整形	台形	24.5 20.5 30	1層5YR1.7/1（黒色）	弱	強	
7	不整形	台形	21.5 21.5 14	1層5YR1.7/1（黒色）	中	強	
8	円形	長方形	27 26.5 44.5	1層7.5YR1.7/1（黒色）	弱	強	
9	楕円形	台形	25 21 30	1層7.5YR1.7/1（黒色）	中	強	
10	円形	台形	31 26 30	1層7.5YR1.7/1（黒色）	弱	中	
11	円形	台形	24 21 20	1層7.5YR1.7/1（黒色）	弱	中	
12	円形	台形	31 26 28	1層10YR2/3（黒褐色）　ローム粒子を5％含む。	中	中	
13	円形	台形	42 36 29	1層7.5YR1.7/1（黒色）　ロームブロックを5％含む。	中	中	
14	円形	台形	31 27 32	1層7.5YR1.7/1（黒色）	弱	中	
15	円形	台形	23 22 26				

第11表　ロームマウンド一覧表　（規模法量―上から長径、短径、深さ　単位cm）

番号	平面形	断面形	規模	覆土	締まり	粘性	備考
1	円形	不整形	(150) (126) 123	1層10YR4/6（褐色）　ハードロームブロックを20%含む。 2層10YR3/3（暗褐色）　ローム粒子を5％含む。 3層10YR2/1（黒色）　径0.5～2cmの礫を5％含む。 4層10YR2/2（黒褐色）　径2～5cmの礫を10%、ローム粒子を3％含む。 5層10YR4/6（褐色）　径1～2cmの礫を30%、ローム粒子を50%以上含む。	強 強 強 弱 弱	中 強 強 強 強	

第6節　遺構外出土遺物

遺構上面確認作業及びトレンチ掘削時に出土した遺物を紹介した。また、各遺構に流れ込んだと考えられる遺物も本節に総括する（第21図）。縄文土器は、文様及び胎土等の特徴から、前期末（1～5）、中期初頭（6～14）、中期後葉（15～17）、後期前半（18・19）がある。器種は、ほとんど深鉢であるが、13の1点のみ内面に連続爪型文を施す、中期初頭の浅鉢と思われるものが含まれる。弥生土器は、やや太めの工具により櫛描波状文を施す、中期後半と思われるもの（20）が1点のみ認められた。土器は、そのほとんどが器形の判別のつかない小破片であった。石器は、黒曜石片や打製石斧片が僅かに確認できる。



第21図　出土縄文・弥生土器拓影図

第V章　ま　と　め

今回の調査では、前述のとおり縄文時代、奈良・平安時代の多数の遺構・遺物を検出した。遺跡範囲が南側に広がったことにより、堂地遺跡に継続する上記時代の集落域に属することが更に判明したといえる。本書のまとめとして、若干の考察をつけ加えておきたい。

縄文時代の遺構としては、初めて中期初頭の住居址を1軒確認した。東部に広がる堂地遺跡の調査でも、今回のおよそ5倍の面積内に僅か3軒の確認で、それも各住居址の間隔が80m以上もあり、今回の検出位置も最も近いもので50m以上も離れていた。それぞれ住居としての構造上の違いも少なく、土器の形式変化もあまりみられないことから、ほぼ同時期に集落を形成せずに単独で住居を構えた可能性が指摘できよう。

また「落し穴」については、前回の第1次調査で縄文前期後半の土器を伴う特異な一例がみられたが、今回の検出例も遺物こそ伴わないが、規模及び構造の特徴が類似する点の多いことから、ほぼ同時期に構築された可能性が高く、一帯が本時期を中心とした狩猟場としての役割があったことを推察できよう。

奈良・平安時代の住居址は、出土遺物の特徴から奈良時代末から平安時代前期に位置づけられるが、この限られた時間幅の中で、各住居址の構造の微妙な違いと、出土土器の観察による形式的な特徴の差などから、更に幾時期かに細分が可能であろう。しかし、第1次調査での検出例も含め、堂地遺跡からの居住域としての継続性を感じとることができるものの、密集した集落形成が行われた様子はなく、むしろ広範囲にわたる一定区域内に、ほぼ単独に近い状況で点在し、数世代もしくは一世代のみで形成された小規模の集落であったことをうかがわせる。

なお末筆にあたり、本事業に多大なご理解とご協力をいただいた、箕輪町土地開発公社をはじめとする関係諸機関と、松島、八乙女の各地域の皆様方、そして調査にご尽力いただいた調査団員の皆様に、本書の刊行をもって改めてお礼を申し上げます。

引用・参考文献（著者名50音順）

笹沢　浩	1975	「長野県下出土の須恵器」信濃26-9・11
長野県教育委員会	1974	48『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』箕輪町
長野県教育委員会	1990	『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書4』総論編
長野県考古学会	1987	「信濃における奈良時代を中心とした編年と土器様相」長野県考古学会誌55・56
長野県史刊行会	1985	長野県史　考古資料編　全1巻（2）　中・南信版
長野県史刊行会	1988	長野県史　考古資料編　全1巻（3）　遺構・遺物
箕輪町誌編纂刊行委員会	1976	箕輪町誌　第1巻　自然・現代編
箕輪町誌編纂刊行委員会	1986	箕輪町誌　第2巻　歴史編
箕輪町教育委員会	1989	『堂地・中道遺跡』
箕輪町教育委員会	1995	『松島大原遺跡』
箕輪町教育委員会	1996	『大道上遺跡』
箕輪町教育委員会	1997	「箕輪町遺跡詳細分布調査報告書」

図　　版

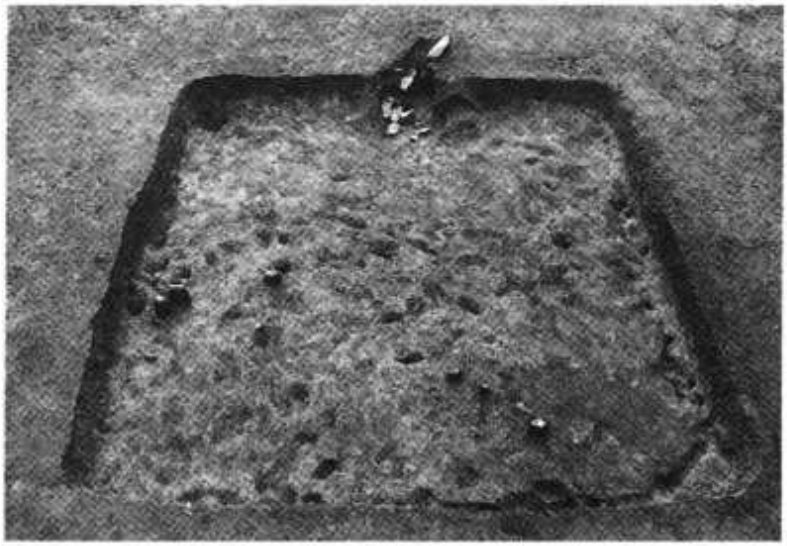
図版1

調査地空景

調査地近景（調査前・東方より）

土層堆積状況

図版2



1号住居址

1号住居址カマド

2号住居址

図版3

2号住居址カマド

2号住居址刀子出土状況

2号住居址ピンセット状鉄器出土状況

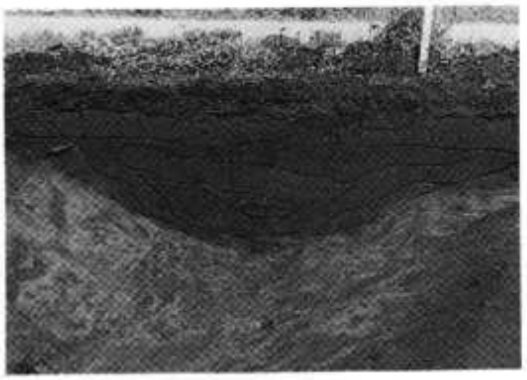
3号住居址

図版4

4号住居址

4号住居址カマド

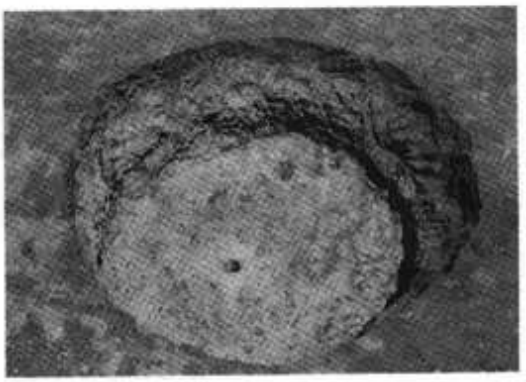
溝状遺構（東方より）



1号溝状遺構土層断面（1－1'）

1号ローム マウンド

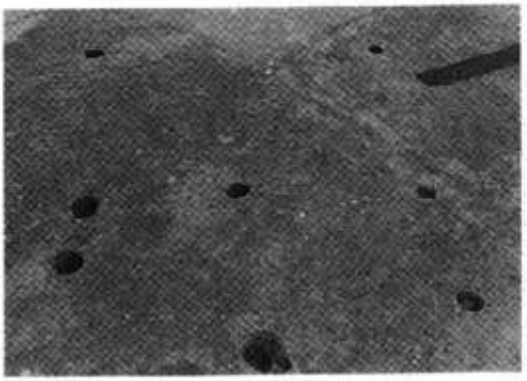
3号土坑



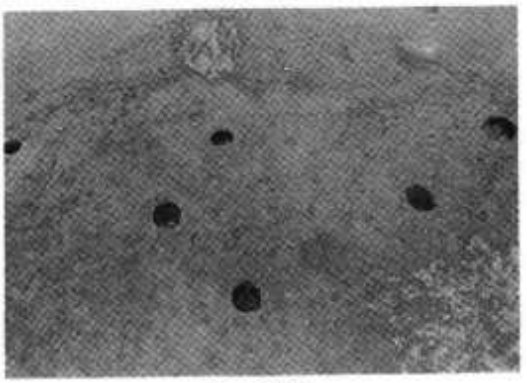
5号土坑

6・7号土坑

調査風景

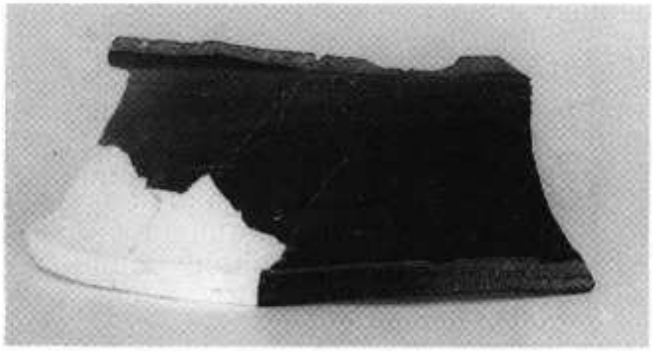


ピット群1



ピット群2

図版6



8－1

8－3

10－1

10－2

10－3

10－4

10－5

10－6

14－1

14－2

14－4

14－5

14－6

14－7

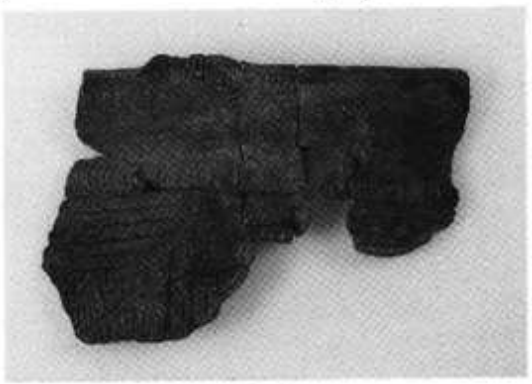
出土遺物1

8－2

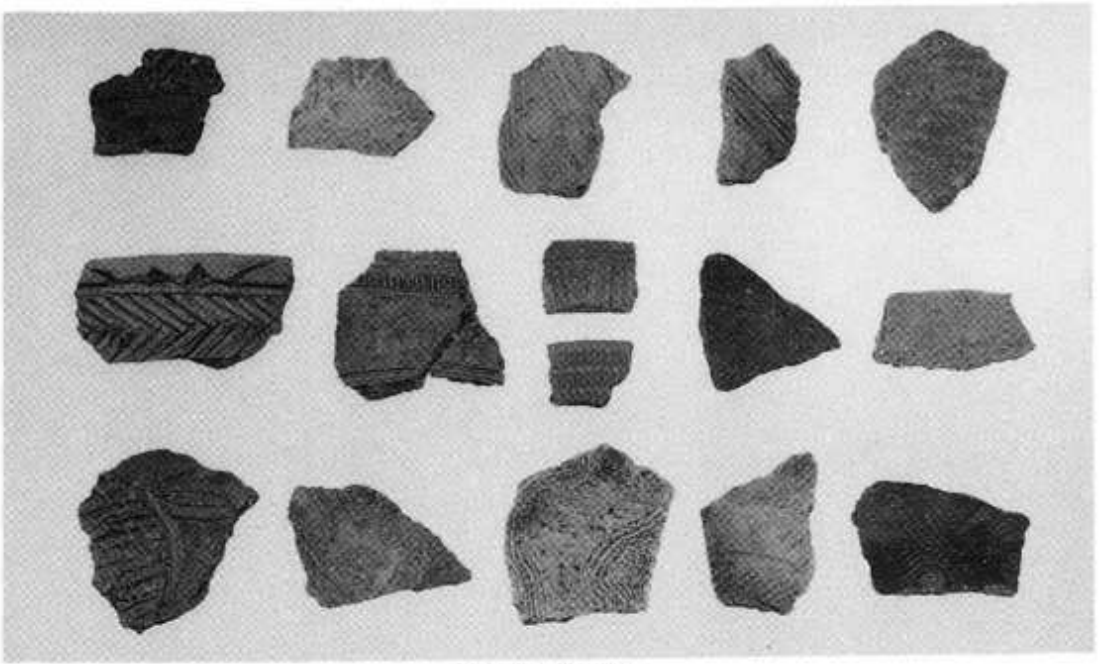
14－8

14－9

12－2



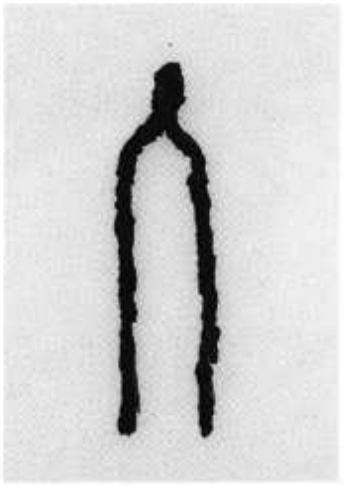
12－1



出土縄文・弥生土器
出土遺物2

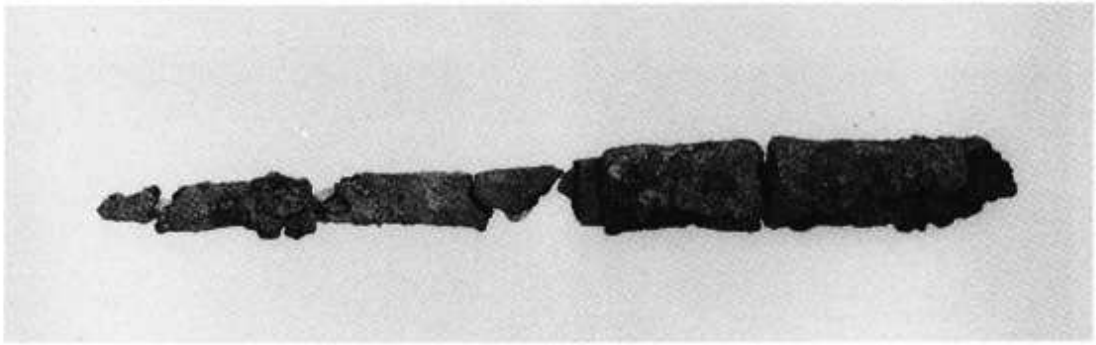
図版8

15－1



10－7

14－10



10－8

出土遺物3

報告書抄録

ふりがな	まつしまおおはらいせき
書名	松島大原遺跡
副書名	平成9年度松島大原公園墓地造成事業（第2期）に伴う埋蔵文化財第2次緊急発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
著者名	赤松　茂・根橋とし子
編集機関	箕輪町教育委員会
所在地	長野県上伊那郡箕輪町大字中箕輪10,291番地　　TEL0265-79-3111㈹
発行年月日	1998年3月21日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 〃〃	東経 〃〃	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
松島大原（まつしまおおはら）	長野県上伊那郡箕輪町大字中箕輪11,217番地1他（ながのけんかみいなぐんみのわまちおおあざなかみのわ）	59		35度 55分 25秒	137度 58分 10秒	19970401～ 19970831	6,000㎡	箕輪町土地開発公社 公園墓地造成工事

所有遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
松島大原	集落址	縄文前期 中期 後期 弥生中期 奈良～平安 近・現代	竪穴式住居址　4棟 溝状遺構　3条 土坑(落し穴含む)　8基 ピット　15基 ローム マウンド　1基	縄文土器 弥生土器 土師器 須恵器 打製石斧 磨製石斧 黒曜石 ピンセット状鉄器 刀子 銅鏡	昭和46年に県教育委員会（中央道建設）、同62･64年に町教育委員会（県道沢尻箕輪線建設）が近接する当地遺跡の緊急発掘調査を実施している。地形の並びから、上記遺跡と本遺跡は、同遺跡群に属すると考えられる。

松島大原遺跡

平成９年度松島大原公園墓地造成事業（第２期）
に伴う埋蔵文化財第２次緊急発掘調査報告書

平成10年３月21日　印刷
平成10年３月21日　発行

発行所　長野県上伊那郡箕輪町教育委員会
印刷所　ほおずき書籍株式会社
長野県長野市柳原2133-5